

現代文問題集 第五冊

事実と見方を読み分ける

導入・説明文と評論の基本

和会塾

この冊子で身につける力

説明文や評論には、観察・測定・資料から確かめられること、その事実を結ぶ説明や推測、何を重く見るかという評価や提案が共に書かれます。この冊子では、それらを役割の違いとして読み分け、どの根拠からどこまで言えるかを短い答案へまとめます。第一冊とともに、説明文・評論の読み方を学ぶ入口として使えます。

- 一 **確かめられること** 数値、出来事、資料に明記された内容を、条件を変えずに拾います。
- 二 **加えられた説明** 事実どうしを原因・仕組み・意味で結んだ箇所を見つめます。
- 三 **目的と見方** 説明者が誰に何を伝え、何を優先しているかを確かめます。
- 四 **言える範囲** 対象、時期、場所、資料の数を越えて言い切っていないかを見ます。
- 五 **答案を作る** 根拠と関係を短い文へ直し、必要なら未確定の点を残します。

各章の進め方

最初に本文・記録・資料を一続きで読みます。事前の専門知識は必要ありません。

選択問題では、本文の内容、関係、確かさが保たれているかを確かめます。

記述問題では、準備メモへ短い語句を置いてから、解答欄へ清書します。

解答編では、正答・答案例だけでなく、根拠、誤答のずれ、必要要素、答案の組み立て方を確認します。章だけを選んで使うことも、第五冊から第一冊・第三冊へ進むこともできます。

三つの読み分け

記録・事実 観察、測定、史料、本文に明記された出来事や数値。

説明・推測 事実を原因、仕組み、仮説、解釈で結んだ内容。

見方・評価 何を重要とみるか、どう評価し、何を提案するかを示す内容。

三つは善悪の分類ではありません。説明や見方にも役割があります。何を根拠にし、どの条件で成り立つかを読むことが目的です。

目次

はじめに・使い方	2
第一章 同じ出来事、二つの説明 — 観察記録＋二つの説明	5
第二章 説明は、何を選んでいるか — 目的の異なる二文章	16
第三章 その答えは、何への答えか — FAQ＋短い論説	27
第四章 動く大地を、どう確かめたか — 科学史＋証拠図	38
第五章 縄文の暮らしについて、どこまで言えるか — 説明文＋考古資料	53
第六章 同じ記録から、何を言うか — 架空記録＋二つの意見文	66
全六章を終えて・奥付	80

各章は、章扉、本文・資料、設問、解答・解説、章全体のまとめ、本文資料の順に収録しています。

第一章 同じ出来事、二つの説明

この章で身につける力 観察記録から直接確かめられることと、その理由について加えられた説明を分け、現時点で言える範囲を捉える。

記録には、時刻、室温、部屋を使った人数、日光の状態が書かれています。説明A・Bは、その記録の一部を結び、室温が上がった理由を考えています。どちらかを急いで正解にせず、記録と説明の距離を確かめます。

読み始める前に

- 一 確かめられること 記録に数値や出来事として書かれている内容拾う。
- 二 説明A・B それぞれが、どの記録を原因と結びつけているかを見る。
- 三 残る点 どちらを確かめるにも、まだ必要な記録がないかを考える。

本文・資料

観察記録 九月十八日・小会議室

室温計は部屋の中央付近に置かれていた。冷房の設定表示は、観察中ずっと24度であった。

記録一 12時55分。室温24.2度。利用者はいない。西側のブラインドは半分下り、壁に直射日光は当たっていない。

記録二 13時00分から13時25分まで、六人が話し合いに利用した。利用中、出入口の扉が一度開いた。

記録三 13時30分。室温25.8度。利用者はいない。西側の壁の一部に日光が当たり始めている。

記録四 14時00分。室温26.6度。13時25分以後、部屋の利用はない。日光は西側の壁のおよそ半分に当たっている。

記録五 同じ部屋について、利用者がいない日や、ブラインドを全部下ろした日の記録は取っていない。冷房の吹き出し口の温度も測っていない。

説明A 人が使ったあとの熱が残った

室温が上がり始めた時間には、六人が部屋を使っていた。人の体や会話に使われた機器などから出た熱が部屋に加わり、利用が終わった後もしばらく残ったのではないか。13時30分に部屋が空いていても、直前までの利用の影響がすぐ消えるとは限らない。

説明B 午後の日光で壁が温まった

13時30分には西側の壁へ日光が当たり始め、14時00分には当たる範囲が広がっている。その間も室温は上がった。日光で壁が温まり、その熱が部屋へ伝わったのではないか。利用者がいなくなった後にも温度が上がった点は、この説明と合う。

記録から説明へ

① 観察記録から直接確かめられるのは、各時刻の室温、部屋の利用、日光の当たり方などである。「人の熱が残った」「日光で壁が温まった」という原因は、温度計に表示されたものではない。説明A・Bが、記録された変化を結びつけて考えた内容である。

② 説明Aは六人の利用と、その直後の室温に注目する。説明Bは、利用が終わった後も温度が上がり、日光の範囲も広がったことに注目する。二つは同じ記録を読んでいるが、原

因として重く見る事実が異なる。どちらか一方だけが働いたとも、両方が同時に働いたとも、この一日の記録だけでは決められない。

③ たとえば、同じ時刻に人が使わなかった日を測れば、日光だけでも同じ上がり方をするかを確かめやすい。ブラインドを全部下ろした日と比べれば、日光の影響を調べられる。冷房の運転状態も必要である。追加の記録は、答えを増やすためではなく、二つの説明が異なる結果を予想する条件を作るために集めるのである。

④ 記録を増やすときも、ただ別の日を測ればよいわけではない。時刻、人数、日光、冷房等のうち、比べたい条件以外をなるべくそろえることで、説明A・Bが予想する違いを見つけやすくなる。

段落番号は、設問で根拠を確認しやすくするために編集上付したもので、本文の一部ではありません。

設問

問一 記録から直接確かめられること

観察記録から直接確かめられることとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア 六人が利用したため、その体温だけが冷房の働きを上回り、室温を上げ続けた。

イ 六人の利用後も室温が上がり、14時には壁の半分へ日光が当たった。

ウ 冷房が13時30分に自動停止したため、その後室温が26度を超えた。

エ 利用を終えた六人がブラインドを上げたことで、壁へ日光が当たり始めた。

確かめられること 数値・時刻…

原因の説明が加わっていないか…

解答欄（記号）

解答 ()

点検 ☐ 本文の範囲 ☐ 関係 ☐ 確かさ 迷った選択肢…

問二 二つの説明の受け取り方

説明A・Bと観察記録との関係について最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア 説明Aは六人の利用を根拠にしているため、日光の影響を調べなくても正しいと分かる。

イ 説明Bは利用後の温度上昇を扱うため、人が使った時間の記録は説明と関係がない。

ウ 二つの説明は原因が異なるので、一方が成り立てば他方は必ず誤りになる。

エ 二つの説明は注目する記録が異なり、今の記録だけでは寄与の大きさを決められない。

説明Aが使う記録：

説明Bが使う記録／まだ必要な記録..

解答欄（記号）

解答 〔 〕

点検 ☐ 本文の範囲 ☐ 関係 ☐ 確かさ 迷った選択肢..

解答・解説

本文・資料の流れ

観察記録 時刻、室温、利用者、日光の範囲という、直接確かめられる内容を示す。
説明Ⅴ・ロ 同じ室温上昇へ、人の利用と日光という別の原因を結びつける。

記録から説明へ 二つの説明が使う根拠と、どちらを確かめるにも足りない比較記録を示す。

問一 記録から直接確かめられること

設問の意図 記録された出来事と、原因についての説明とを区別する。

根拠 記録二～四には、六人の利用、利用後の室温上昇、14時の壁への日光が明記されている。

正答 イ

正答の理由 イは、人数、室温の変化、日光の状態という記録内の内容だけを述べている。

誤答のずれ

ア 六人の利用は記録されているが、それだけが原因だという部分は説明Ⅴの推測である。

イ 人数、利用後の温度変化、日光の範囲がいずれも記録にある。

ウ 冷房の設定表示はあるが、運転が停止したとは記録されていない。

エ ブラインドの状態は記録されているが、誰が動かしたかは書かれていない。

☆自己採点の観点

□ 記録に明記された数値と出来事だけを選んだか。

□ 「～ため」という原因を、記録された事実と混同していないか。

問二 二つの説明の受け取り方

設問の意図 二説明を単純な二者択一にせず、それぞれの根拠と未確認部分を捉える。

根拠 「記録から説明へ」第二・第三段落。二説明は注目する事実が異なり、比較できる別日の記録等が必要だと述べる。

正答 エ

正答の理由 エは、二説明が別の事実を重く見ていることと、一日の記録だけでは原因の寄与を決められないことの両方を押さえている。

誤答のずれ

- ア 六人の利用はAを支えるが、日光等の別原因を除くものではない。
- イ 利用者がいなくなった時刻は、Bが注目する温度変化の条件として必要である。
- ウ 人の熱と日光が同時に影響した可能性もあり、必ず一方だけとはいえない。
- エ 本文が示す根拠の違いと、現時点の言える範囲に合う。

☆自己採点の観点

- 二つの説明が使う記録の違いを捉えたか。
- 原因を一つへ決めるには追加の比較が要すると確認したか。

問三 記録と説明の違い(30〜40字)

設問の意図 記録された内容と、原因を結ぶ説明との違いを短く言い換える。

根拠 「記録から説明へ」第一段落。記録は室温・利用・日光を示し、A・Bは原因を考えた内容である。

必要要素 ①記録は室温や利用等を示す。②A・Bはそれらを原因として結びつけた考えである。

関係と条件 記録と説明を対比し、説明には記録を結ぶ判断が加わると示す。

答案の骨格 記録は〽を示し、説明A・Bは〽を原因として結んだ考えである。

模範解答

記録は室温と利用状況を示し、説明A・Bはそれらを原因として結んだ考えである。

別解例①

記録が示すのは温度や日光で、説明A・Bは変化の原因を考えて加えた内容である。

別解例②

室温や利用は記録された事実で、説明A・Bはその変化に原因を与えた考えである。

答案で注意したい点

「記録は正しく、説明は間違い」としない。説明は記録から原因を考える役割を持つが、追加の確認が必要なのである。

☆自己採点の観点

- 記録が示す内容を一つ以上挙げたか。
- 説明A・Bには、原因を結ぶ考えが加わると示したか。

問四 現時点で言えること(50～60分)

設問の意図 観察された変化を保ちながら、原因を確定しない範囲と追加確認をまとめる。

根拠 記録一〇五、および「記録から説明へ」第二・第三段落。

必要要素 ①利用後から日光が広がる間に室温が上がった。②原因は一つへ決められない。③利用や日光の条件を変えた比較記録が要る。

関係と条件 確かめられる変化を先に置き、「ただし」で原因の未確定と必要な比較をつなぐ。

答案の骨格 〓間に室温は上がった。ただし原因は決められず、〓日を比べる必要がある。

模範解答

六人の利用後から日光が広がる間に室温は上がったが、原因は決められず、利用者や日光の条件を変えた日と比べる必要がある。

別解例① 利用の終了後も日光の範囲と室温は上がった。ただし原因は一つに定まらず、人がいない日や日光を遮った日の記録が必要である。

別解例② 室温上昇と人の利用、日光の広がり確認できるが、因果は未確定であり、片方の条件を除いた日の測定と比較しなければならない。

答案で注意したい点 「どちらも原因である」と確定しても、「どちらか分からない」で止めても十分である。何を比べれば説明を確かめられるかまで示す。

☆自己採点の観点

- 室温上昇という記録上の変化を示したか。
- 人の利用か日光かを、今の記録だけで決めていないか。
- 条件を変えた比較記録が必要だと書いたか。

章全体のまとめ

記録は、観察した条件と変化を確かめる土台です。説明は、その記録を原因や仕組みで結びます。説明が加わることで自体は誤りではありません。ただし、どの記録を使い、別の原因をどう確かめるかが示されていないければ、推測を事実として受け取ることになります。

本文資料

小会議室、観察記録、説明・田は、読解問題のために和会塾が設定した架空例である。

第二章 説明は、何を選んでいるか

この章で身につける力 同じ機械について書かれた二つの説明を比べ、目的と相手によって選ばれる情報が変わることを読む。

文章Aと文章Bは、架空の図書館にある同じ返却機を説明しています。一方が正しく、他方が間違っているではありません。誰が、何をするために読む文かを確かめ、選ばれた情報と省かれた情報の働きを見ます。

読み始める前に

- 一 目的 誰が、何をするために読む説明かを短く書く。
- 二 選んだ情報 その目的に直接必要な手順・点検・記録を拾う。
- 三 残る条件 別の目的に使うなら、どの情報が足りないかを確かめる。

本文・資料

文章▶ 初めてセルフ返却機を使う方へ

返却する本を一冊ずつ投入口へ入れてください。画面に書名が表示され、緑色のランプが点灯したら、その本の受付は完了です。続けて返す本がある場合も、一冊ずつ表示を確認めます。すべて終えたら「返却終了」を押し、必要に応じて受付票を受け取ってください。

赤色のランプが点灯し、本が戻ってきたときは、向きを変えて一度だけ入れ直します。それでも受け付けられない場合や、画面の書名が本と異なる場合は、無理に押し込まず、近くの職員へ渡してください。付属資料がある本、他館から借りた本、大型の本は、最初から職員用窓口へ返します。

文章田 開館前の点検を担当する方へ

開館前に、返却機の回収箱と搬送路を確認する。前日に受け付けた冊数と回収箱内の冊数が一致しない場合は、機械内に本が残っていないかを調べる。試験用の本を一冊通し、書名表示、緑・赤のランプ、受付票の印字が作動することを確認する。異常があれば利用を止め、開始時刻と画面の表示を点検記録へ残す。

閉館後は、受け付けられずに職員用窓口へ回った本の種類と件数を記録する。同じ種類の本でエラーが続くときは、利用者の入れ方だけを原因とせず、登録情報や読み取り部分も確認する。点検後に運転を再開した場合は、行った処置と再試験の結果を追記する。

二つの説明が残すもの

① 文章▶は、初めて使う人が本を返し、困ったときに安全に職員へ引き渡せるように書かれている。そのため、一冊ずつ入れること、表示とランプを確認すること、特別な本は窓口へ返すことを選んでいく。前日の冊数や搬送路の点検は、利用者が返却する手順には直接必要ないため書かれていない。

② 文章④は、担当者が機械を開館前に使える状態へ整え、異常の原因を後から確かめられるようにする説明である。利用者向けの文章より、冊数の照合、試験、停止時刻、処置の記録を詳しく書く。一方、本をどの向きで入れ直すかは、担当者の点検目的には中心でない。

③ 説明が情報を省くことは、すぐに不正確さを意味しない。目的に必要な情報を選ぶことで、読み手は行動しやすくなる。ただし、文章②だけを読んで管理点検までできると考えれば、機械内の残留や記録方法を見落とす。反対に、文章④だけを利用者へ示せば、返却の基本手順が見つけにくい。説明が十分かどうかは、何についての説明として使うかによって決まる。

④ 二つの説明を比べると、同じ対象にも複数の入口があると分かる。相手と目的を明らかにし、必要な情報を選び、対象外の場面には別の説明が要ると示す。情報を多く載せることだけでなく、どこまでをこの文が引き受けるかを見えるようにすることが、正確な説明の条件なのである。

段落番号は、設問で根拠を確認しやすくするために編集上付したもので、本文の一部ではありません。

設問

問一 文章Aが選んだ情報

文章Aが、文章Bより詳しく説明している内容として最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア 利用者が本を一冊ずつ返し、受付できない場合に職員へ渡すまでの手順。

イ 前日の受付冊数と回収箱内の冊数を照合し、機械内の残留まで調べる点検方法。

ウ 異常で運転を停止した時刻と、再開前に行った処置を残す記録方法。

エ 同じ種類の本でエラーが続くとき、登録情報まで調べる判断方法。

目的 誰が何をするためか..

文章Aが選んだ手順..

解答欄（記号）

解答 〔 〕

点検 ☐本文の範囲 ☐関係 ☐確かさ 迷った選択肢..

問二 別の目的へ使うときに足りない情報

文章 Δ だけを使って、職員が開館前の管理点検をしようとした場合に不足する情報として最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア 利用者が、返却する本を一冊ずつ投入口へ入れ、画面の書名を確認すること。

イ 画面の書名が本と違うとき、無理に押し込まず近くの職員へ本を渡すこと。

ウ 前日の冊数照合、機械の作動試験、異常時の処置と結果を記録すること。

エ 付属資料がある本や大型の本を、最初から職員用窓口へ返すこと。

新しい目的 管理点検に必要なこと…

文章 Δ に書かれていない情報…

解答欄(記号)

解答 ()

点検 ☐本文の範囲 ☐関係 ☐確かさ 迷った選択肢…

解答・解説

本文・資料の流れ

文章㍶ 初めて使う人が返却を完了するため、操作とエラー時の対応を選ぶ。

文章㍷ 担当者が機械を管理し、異常を検証するため、点検と記録を選ぶ。

二つの説明が残すもの 省略の適否は、情報の量ではなく、説明の相手と目的に照らして決まると示す。

問一 文章㍶が選んだ情報

設問の意図 文章㍶の相手と目的から、優先された情報を見分ける。

根拠 文章㍶全体。返却する本の入れ方、表示の確認、受け付けられない場合の対応が順に示される。

正答 ア

正答の理由 アは、初めて使う利用者が返却を完了するという文章㍶の目的に沿う。

誤答のずれ

ア 文章㍶が順を追って説明する利用者向けの手順である。

イ 文章㍷が担当者へ示す、開館前の冊数点検である。

ウ 文章㍷が異常時の検証のために求める記録である。

エ 文章㍷が、利用者だけを原因にしないために示す点検である。

☆自己採点の観点

□ 文章㍶の読み手を、初めて利用する人だと確認したか。

□ 利用者が返却を終えるための手順を選んだか。

問二 別の目的へ使うときに足りない情報

設問の意図 説明が十分かどうかを、新しく指定された目的に照らして判断する。

根拠 文章㍷の冊数照合、試験用の本による確認、停止時刻・処置・再試験結果の記録。

正答 ウ

正答の理由 ウは管理担当者が機械の状態を調べ、後から処置を確かめるための情報で、文章Aにはない。

誤答のずれ

- ア 文章Aに明記され、利用者の返却手順に属する。
- イ 文章Aに明記され、表示が異なる場合の対応に属する。
- ウ 管理点検に必要なだが、利用者向けの文章Aには書かれていない。
- エ 文章Aに明記され、窓口へ回す本の条件に属する。

☆自己採点の観点

- 設問が指定した目的を、利用ではなく管理点検だと確認したか。
- 文章Aにないうえ、文章Bでは点検の中心になる情報を選んだか。

問三 情報を省く理由（40～50字）

設問の意図 情報の省略を不正確さと決めつけず、相手と目的に応じた選択として説明する。

根拠 「二つの説明が残すもの」第一段落。文章Aは利用者が返却し、困ったときに職員へ渡すための説明である。

必要要素 ①初めて使う人が返却を終える目的。②管理点検の情報は、その手順に直接必要でない。

関係と条件 文章Aの目的を理由として、管理情報が省かれたことを因果で結ぶ。

答案の骨格 〳人が返却を終えるための説明で、〳はその手順に直接必要ないからである。

模範解答 初めて使う人が本を返し終えるための説明で、冊数や搬送路の管理点検はその手順に直接必要ないからである。

別解例① 利用者が安全に返却を完了することが目的であり、担当者が行う冊数照合や機械点検は別の仕事だからである。

別解例② 返却する利用者に必要な操作と対応を示す文章なので、冊数確認や搬送路の点検までは扱わないためである。

答案で注意したい点 「難しいから省いた」とだけ書かない。文章Aが引き受ける目的に対して、どの情報が必要かという選択を説明する。

☆自己採点の観点

- 文章Aの相手と目的を示したか。
- 省かれた点検情報が、利用者の返却手順には直接必要でないと説明したか。

問四 二つの説明の違い（60～70字）

設問の意図 二文章を、情報量の多少ではなく、目的と選択された情報の対応から比較する。

根拠 文章A・B全体、および「二つの説明が残すもの」第一～第三段落。

必要要素 ①Aは利用者の返却完了を目的に操作と対応を選ぶ。②Bは管理・検証を目的に点検と記録を選ぶ。③別目的には別説明が要る。

関係と条件 AとBを対比し、どちらも目的の範囲で成立することを示す。

答案の骨格 Aはくため操作を示し、Bはくため点検と記録を示す。どちらもくに応じた説明である。

模範解答

文章Aは利用者が返却を終えるために操作と困った時の対応を選び、文章Bは職員が機械を管理し検証するために点検と記録を選んでいる。

別解例① Aは初めて使う人の返却手順を、Bは担当者が異常を見つけて後から確かめる点検と記録を示し、それぞれ目的に必要な情報を選んでいる。

別解例② 利用者向けのAは本の入れ方とエラー時の対応を示すが、管理者向けのBは冊数照合、作動試験、処置記録を選び、異なる目的を担っている。

答案で注意したい点 「Aは簡単にBは詳しい」とだけ比べると、なぜ情報が違うかが見えない。誰が何をするための説明かを対応させる。

☆自己採点の観点

- 文章Aの目的と、操作・対応を結びつけたか。
- 文章Bの目的と、点検・記録を結びつけたか。
- 情報量の多少だけで優劣を決めていないか。

章全体のまとめ

説明は、対象について知り得ることをすべて並べる文ではありません。相手と目的に応じて、いま必要な情報を選びます。省かれた情報があるだけで不正確になるわけではありませんが、別の目的へ使うときには、その文が扱っていない条件や手順を補う必要があります。

本文資料

青葉市図書館、セルフ返却機、文章A・Bの運用内容は、読解問題のために和会塾が設定した架空例である。

第三章 その答えは、何への答えか

この章で身につける力 答えの一部だけを取り出さず、どの問い、対象、場面、条件へ応じた答えであるかを確かめる。

「この答えは短くても、その前にある問いと条件を受けています。『使える』『予約はいらない』という部分だけを覚え、何を、誰が、いつ使う場合なのかを戻して読みます。

読み始める前に

- 一 問い 答えが何について尋ねられたものを戻す。
- 二 答えが示すこと 対象、場面、期間等の条件を含めて読む。
- 三 答えていないこと 似ているが別の問いへ、勝手に広げていないかを確かめる。

本文・資料

資料一 青葉市ものづくり室 利用案内（架空）

次の規則、施設、講習は教材用の架空設定である。

質問一 今日、予約なしで工作台を使えますか。

回答一 個人用の工作台は、空きがあれば当日でも使えます。四人以上で使う共同台は、前日までの予約が必要です。また、月に一度の設備点検中は、どちらの工作台も使えません。

質問二 安全講習を一度受ければ、室内の道具を自由に使えますか。

回答二 基本講習の修了後は、手工具を使えます。電動のこぎりと穴あけ機は、それぞれの機器講習を修了し、担当職員がいる時間だけ使えます。基本講習だけで、すべての機器を使えるわけではありません。

質問三 自分で用意した材料を持ち込めますか。

回答三 紙、布、指定された種類の木材は、受付で確認を受けてから持ち込めます。強いにおいや細かな粉が出る材料は、換気設備と清掃方法が異なるため、この部屋では扱えません。

答えの前後を読む

① FAQでは、読み手が探しやすいよう、一つの問いに一つの答えが置かれる。しかし、答えの中の短い言葉だけを取り出すと、書かれていた範囲が消える。「空きがあれば当日でも使えます」という回答一の文は、個人用の工作台についての答えである。共同台や設備点検中の利用まで認める文ではない。

② 回答二の「使えます」も、何を使えるかで意味が変わる。基本講習後に使えるのは手工具である。電動のこぎりや穴あけ機には、機器ごとの講習と職員がいる時間という別の条件が付く。「講習を受けた」という共通点だけで、道具の種類を越えて答えを広げることができない。

③ 答えを正確に読むには、問いを復元する必要がある。対象は個人用の台か共同台か、道具は手工具か電動機器か、時期は通常日か点検中か。答えが示す条件を問いと組み合わせれば、どの場面で成り立つかが分かる。

④ 同時に、その答えが扱っていないことも残る。回答一は工作台の利用を説明するが、材料の持ち込みには答えていない。回答三は持ち込める材料を説明するが、工作台の予約方法には答えていない。どちらも正しい内容を含んでいても、別の問いへの答えとして置けば不足する。

⑤ 短い答えは、いつでも通用する標語ではない。問い、対象、条件と一緒に受け取ることで初めて、答えの強さと範囲が定まる。新しい状況で使うときは、元の問いと同じか確かめ、違うなら何を尋ね直す必要があるかを考える。その作業によって、答えを捨てずに、必要な範囲へ使い直せるのである。

⑥ 検索結果や案内の見出しでは、回答の最初の一文だけが表示されることもある。その一文が求めていた答えに見えても、続く条件を読まずに行動すれば、対象の違いを見落とす。短さは確かに便利ではあるが、その条件が消えたことを意味しない。

⑦ 反対に、あらゆる場合を一つの回答へ詰め込めばよいわけでもない。問いを分け、各回答が扱う範囲を明確にすれば、読み手は自分の状況に近い項目を選べる。必要なのは、いつでも完全な答えではなく、今の問いと答えが対応しているかを確かめられる構成である。

段落番号は、設問で根拠を確認しやすくするために編集上付したもので、本文の一部ではありません。

設問

問一 どの問いへの答えか

「空気があれば当日でも使えます」という文が、資料一で直接答えている問いとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア 共同台を四人以上で使う場合も、当日に申し込めば使えるか。

イ 設備点検中に、個人用と共同用の工作台を使えるか。

ウ 基本講習を受けた当日に、電動のこぎりを使えるか。

エ 個人用の工作台を、空気がある日に予約なしで使えるか。

問い 対象となる台..

答えが成り立つ条件..

解答欄（記号）

解答 〔 〕

点検 ☐ 本文の範囲 ☐ 関係 ☐ 確かさ 迷った選択肢..

問二 答えが示していないこと

回答二だけでは判断できないこととして最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア 基本講習を修了した人が、手工具を使えるようになるかどうか。

イ 機器講習をいつ申し込み、修了に何日かかるかという手続。

ウ 電動のこぎりの使用に、担当職員の在室が必要かどうか。

エ 基本講習だけで、室内のすべての機器を使えるかどうか。

回答二が示すこと・・

回答二に書かれていないこと・・

解答欄（記号）

解答 〔 〕

点検 ☐ 本文の範囲 ☐ 関係 ☐ 確かさ 迷った選択肢・・

解答・解説

本文・資料の流れ

資料一 工作台、道具、材料について、別々の問いと回答を示す。

答えの前後を読む 短い答えは、問い・対象・場面・時期と組み合わせて初めて範囲が定まると説明する。

新しい状況 元の問いと同じかを確認、違う場合は答えていない条件を把握し直す方法へ進む。

問一 どの問いへの答えか

設問の意図 答えの一文を、直前の問い・対象・条件へ戻して読む。

根拠 質問一と回答一。予約なしで当日使えるのは、空きがある個人用の工作台である。

正答
エ

正答の理由 エは、個人用、空きがある日、予約なしという回答一の範囲を保っている。

誤答のずれ

ア 共同台には前日までの予約が必要であり、対象が違う。

イ 設備点検中はどちらの台も使えず、時期の条件が違う。

ウ 電動のこぎりは回答二の対象で、機器講習と職員の在室が必要である。

エ 回答一の対象と条件を変えずに問いへ戻している。

☆自己採点の観点

□ 答えの主語に当たる対象を、個人用の工作台だと戻したか。

□ 空きがある日という条件を残したか。

問二 答えが示していないこと

設問の意図 答えに明記された条件と、その答えが扱っていない手続とを区別する。

根拠 回答二は使用できる道具と条件を示すが、講習の申込時期や所要日数は示していない。

正答
イ

正答の理由 イの手續情報は回答二にないため、別に尋ねる必要がある。

誤答のずれ

- ア 基本講習後は手工具を使えと明記されている。
- イ 機器講習の申込方法・時期・所要日数は書かれていない。
- ウ 担当職員がいる時間だけ使えと明記されている。
- エ 基本講習だけでは全機器を使えないと明記されている。

☆自己採点の観点

- ☐ 回答二に書かれた内容を、書かれていないことと取り違えていないか。
- ☐ 一般に知りたい情報ではなく、この回答が扱っていない情報を選んだか。

問三 正しい答えが不足するとき（40～60字）

設問の意図 情報の正しさと、現在の問いへ十分に答えていることを区別する。

根拠 「答えの前後を読む」第四段落。工作台の利用と材料の持ち込みは別の問いであり、一方の回答は他方を扱わない。

必要要素 ①答えは元の問い・対象へ応じる。②別の問いでは必要な対象や条件が扱われていないことがある。

関係と条件 正しい内容であっても、問いとの対応がずれば不足するという理由を示す。

答案の骨格 答えは〴〵の内容であり、別の問いに必要な〴〵を扱っていない場合があるからである。

模範解答

答えは元の問いの対象と条件に応じた内容であり、別の問いに必要な情報までは扱っていない場合があるからである。

別解例①

内容が正しくても、別の問いでは対象や場面が変わり、必要な条件が答えの中に示されていないことがあるためである。

別解例②

回答が引き受けるのは元の問いの範囲であり、別の問いに移すと、必要な対象や条件が欠けることがあるからである。

答案で注意したい点

「答えが間違っているから」としない。元の問いには正しくても、別の問いが求める情報を引き受けていないのである。

☆自己採点の観点

- 答えが元の問いの範囲で成立すると示したか。
- 別の問いでは対象・条件等が足りなくなると説明したか。

問四 答えを改めて用いる方法（60～80字）

設問の意図 ひとつの答えを捨てるのでも普遍化するのでもなく、問いと条件へ戻して使い直す方法をまとめる。

根拠 「答えの前後を読む」第三～第五段落。対象・場面・時期を問いへ戻し、違う状況では尋ね直す。

必要要素 ①元の問い・対象・条件を復元する。②新しい状況と同じかを比べる。③違う場合は答えていない点を把握する。

関係と条件 復元↓比較↓必要な再質問の順で示す。

答案の骨格 まず〴〵を戻し、新しい状況と比べる。異なる場合は、〴〵を尋ね直して使える範囲を定める。

模範解答

まず答えを元の問い、対象、場面の条件へ戻し、新しい状況と同じかを比べる。異なる場合は、答えが扱っていない点を尋ね直し、使える範囲を定める。

別解例① 答えだけを取り出さず、何についてどの条件で述べたものを復元する。その条件が新しい場面にも当てはまるかを確かめ、違う点は改めて質問する。

別解例② 元の問いが求めた対象と条件を答えと組み合わせ、新しい状況との共通点と違いを見る。答えていない条件があれば、そこを尋ね直してから用いる。

答案で注意したい点 「条件を確認する」とだけ書くと、何をどう確かめるかが見えない。元の問いを復元し、新しい状況との差を探す。

☆自己採点の観点

- 元の問い・対象・条件へ答えを戻したか。
- 新しい状況との違いを確かめると示したか。
- 答えていない点は尋ね直すと書いたか。

章全体のまとめ

答えは、問いと離れて単独で存在するものではありません。何について、どの条件で尋ねられたかを受けて、答えの範囲が決まります。正しい答えでも別の問いへ移せば不足することがあります。元の問いを戻し、違う条件を把握すること、答えに必要な範囲へ使い直せます。

本文資料

青葉市ものづくり室、利用規則、FAQは、読解問題のために和会塾が設定した架空例である。

第四章 動く大地を、どう確かめたか

この章で身につける力 観測事実、仮説、新しい証拠、説明モデルの更新を時系列で読み、何が何を支えたかを区別する。

大陸移動説が現れた時点で、現在のプレートテクトニクスが完成していたわけではありません。最初の仮説が使った証拠、説明できなかった点、海底から得られた新しい観測、その観測を結ぶ新しいモデルを順に読みます。

読み始める前に

- 一 観測 その時点で直接確かめられていた形・化石・海底の模様を拾う。
- 二 当時の説明 観測を結ぶために、どの仮説や仕組みが提案されたかを見る。
- 三 後の証拠 新しい観測が、どの説明を強め、どの不足を埋めたかを確かめる。

本文・資料

仮説から説明モデルへ

① 現在では、大陸を載せた巨大な板状の部分がゆっくり動くというプレートテクトニクスが、地震や火山、海底と大陸の成り立ちを説明する基礎になっている。しかし、この説明は、大陸の形を眺めただけで一度に完成したのではない。観測できる範囲が海底へ広がり、別々に見えた証拠を結ぶモデルが作られるまでには、段階があった。

② 20世紀初め、アルフレッド・ウエゲナーは、大西洋をはさんだ大陸の輪郭が対応すること、離れた大陸に同じ種類の化石や連続する岩石・山地が見つかること、現在の位置では説明しにくい過去の氷河の痕跡などを一つの問題として扱った。そして、大陸はかつて一つにまとまり、その後に分かれて移動したという大陸移動説を示した。

③ この仮説は、各地の証拠の並びを一つの歴史として説明できた。一方、大陸を何が動かし、固いと考えられていた海底をどう通るのかについて、納得できる仕組みを示せなかった。輪郭や化石が対応することは過去の結合を考える理由になっても、それだけで現在までの移動過程を直接観測したことはない。多くの研究者が受け入れなかった理由の一つは、この説明上の空白にあった。

④ 第二次世界大戦の前後から、音波による測深や海上での磁気測定が進み、海底についての記録が増えた。海の中央には長く連なる海嶺があり、その中心付近に割れ目を伴う場所があること、別の場所には深い海溝があることが分かった。大陸だけを見ていた段階では知られていなかった地形が、海底にも大きな変化が起きている可能性を示した。

⑤ 1960年代初め、海嶺で地下から上がった物質が新しい海底を作り、古い海底を両側へ押し広げ、別の場所では海底が地球内部へ沈み込むという海洋底拡大のモデルが提案された。このモデルなら、大陸だけが海底をかき分けるのではなく、大陸を含む広い板状の部分が海底とともに動く道筋を考えられる。もっとも、提案された時点では、それも観測を結ぶ仮説であり、さらに確かめる必要があった。

⑥ 海底の磁気測定では、海嶺にほぼ平行な帯が交互に並び、海嶺の両側で似た順序を示すことが分かった。海底の玄武岩は冷えて固まるとき、その時代の地球磁場の向きを記録する。地球の磁場は過去に何度も逆転している。もし海嶺で新しい海底が生まれ、両側へ移るなら、異なる時期にできた岩石の磁気の向きが、海嶺を中心に左右対応する帯として残ると予想できる。実際の模様がこの予想と合ったことは、海洋底拡大を強く支えた。

⑦ さらに、海底の岩石は海嶺の近くほど若く、離れるほど古くなる傾向を示した。地震や火山の多くが、海嶺、海溝などの細長い帯に分布することも分かってきた。磁気縞だけでなく、年代、地形、地震・火山の分布を合わせることで、地表が複数のプレートに分かれ、境界で新しい海底が生まれたり沈み込んだりする説明が組み立てられた。

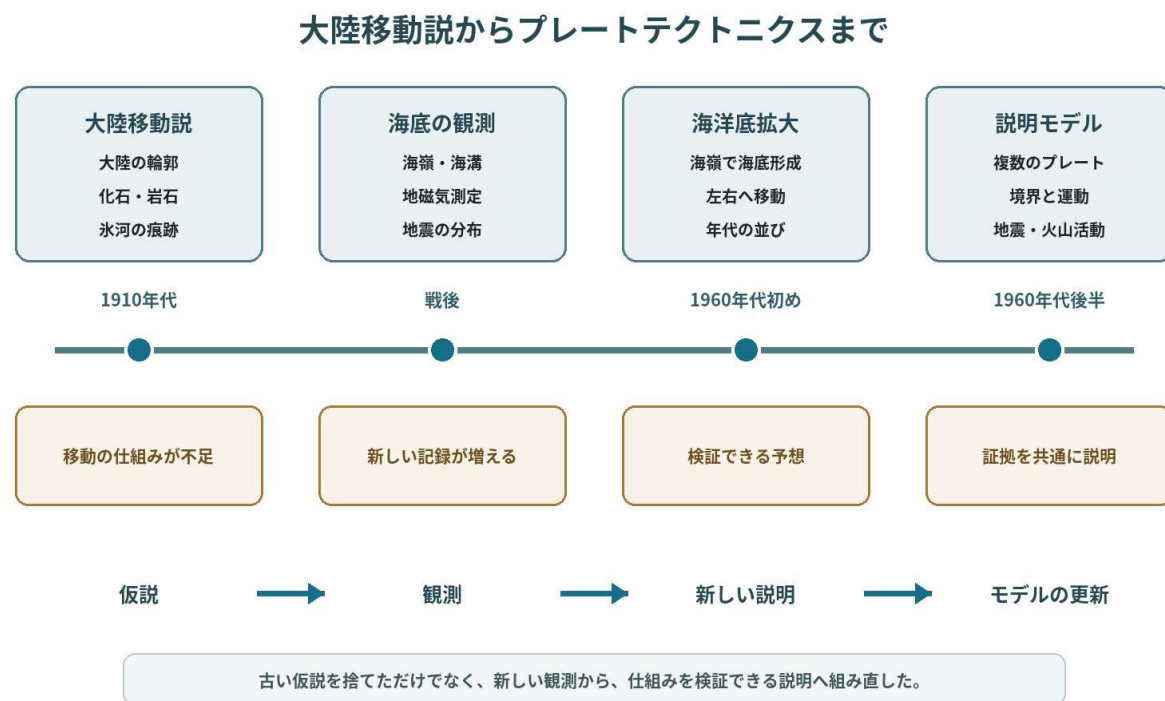
⑧ ここで、大陸移動説がそのまま証明され、名前だけが変わったと捉えるのは正確でない。大陸が過去に位置を変えたという中心的な考えは受け継がれたが、動く単位と仕組みは大きく組み直された。新しい海底観測がなければ、プレートの誕生・移動・沈み込みを一つの循環として説明することはできなかった。

⑨ 科学的な説明が更新されるとき、古い仮説は全面的に正しかったか、完全に無意味だったかの二つには分れない。ある証拠を結びつけた働きは残り、説明できなかった点は新しい観測によって問い直される。新しいモデルは、既知の事実を言い換えるだけでなく、どのような模様や年代が観測されるはずかを予測し、その予測と記録との一致によって支えられるのである。

段落番号は、設問で根拠を確認しやすくするために編集上付したもので、本文の一部ではありません。

資料一 大陸移動説からプレートテクトニクスまで

仮説、新しい海底観測、説明モデル、支持する証拠の順を簡略化して示す。年代は学説史の大きな流れを読むための目安である。

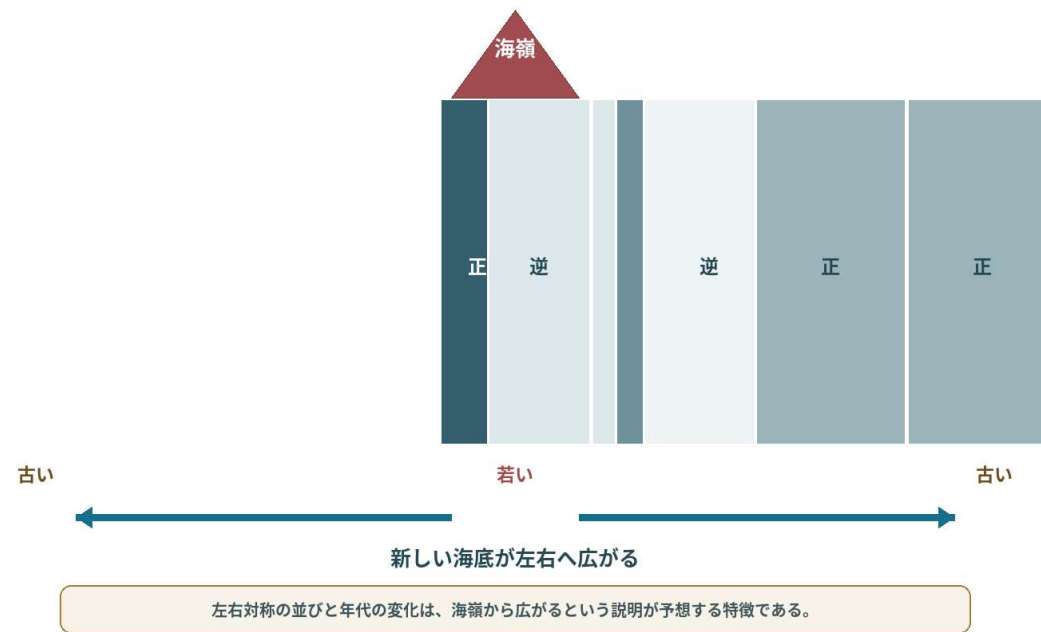


この図は、米国地質調査所等の公的解説をもとに、和会塾が学習用に作成した模式年表である。

資料二 海嶺をはさんだ磁気縞と海底年代の模式図

海嶺で新しい海底が作られ、左右へ広がる場合に予想される磁気の帯と年代の並びを示す。実在の海域を測った図ではない。

海嶺をはさんだ磁気縞と海底年代（模式図）



図は仕組みを読むための模式図であり、縞の幅や年代間隔を実測値として用いることはできない。

設問

問一 初期の仮説が説明したこと

大陸移動説が示された当時の証拠と課題について最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア 海底の磁気縞を観測し、プレートが沈み込む場所まで明らかにしたが、化石の対応は説明できなかった。

イ 大陸の移動を直接測定し、動く速さを確定したが、過去の氷河の痕跡だけが仮説と合わなかった。

ウ 輪郭・化石・岩石等の対応を一つに結びつけたが、大陸が動く仕組みを十分に示せなかった。

エ 海嶺で新しい海底が生まれると予測したが、海底の年代と地震の分布を調べる方法がなかった。

観測 初期の証拠..

当時の説明／説明できない点..

解答欄（記号）

解答 〔 〕

点検 ☐ 本文の範囲 ☐ 関係 ☐ 確かさ 迷った選択肢..

問二 海洋底拡大モデルの働き

海洋底拡大のモデルが、大陸移動説に対して新たに示した内容として最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア 海嶺で海底が生まれて両側へ動き、別の場所で沈み込むという移動の道筋。

イ 離れた大陸で同じ化石が見つかることだけを、偶然の一致として退ける考え。

ウ 大陸の輪郭が似ていれば、海底の観測を行わなくても移動を証明できるという基準。

エ 地震や火山は大陸の内部だけで起こり、海底の地形とは関係しないという説明。

当時の説明 海嶺で起きること・・

移動する単位／行き先・・

解答欄(記号)

解答 ()

点検 ☐本文の範囲 ☐関係 ☐確かさ 迷った選択肢・・

問三 古い仮説と新しいモデルの関係

本文が示す、大陸移動説とプレートテクトニクスとの関係として最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア 初期の仮説は誤りだったため、そこで用いられた大陸の証拠もすべて無意味になった。

イ 初期の仮説が完全に正しく、後の研究者は海底の新証拠を加えず別の言葉で言い直ただけである。

ウ 海底の新しい証拠は初期の仮説と無関係で、大陸の移動とは別の現象だけを説明した。

エ 大陸が位置を変える考えは残ったが、新しい海底観測によって動く単位と仕組みが組み直された。

初期から残った考え…

後の証拠で変わった説明…

解答欄（記号）

解答 〔 〕

点検 ☐ 本文の範囲 ☐ 関係 ☐ 確かさ 迷った選択肢…

解答・解説

本文・資料の流れ

第一～第三段落 大陸間の証拠を結ぶ大陸移動説と、移動の仕組みという課題を示す。
第四・第五段落 海底地形の観測と、海嶺で海底が生まれ両側へ動く海洋底拡大モデルを示す。
第六・第七段落 磁気縞、海底年代、地震・火山分布がモデルの予測を支える過程を説明する。
第八・第九段落 初期の考えを一部残しながら、動く単位と仕組みを新しい証拠で組み直す科学的更新を示す。

問一 初期の仮説が説明したこと

設問の意図 初期の証拠が支えた内容と、移動の仕組みという未解決点を分ける。

根拠 第二・第三段落。輪郭・化石・岩石・氷河痕跡を結びつけた一方、移動の仕組みを示せなかった。

正答 ウ

正答の理由 ウは、大陸移動説の根拠と、当時の説明上の空白をともに捉えている。

誤答のずれ

ア 磁気縞と沈み込みは、後の海底観測とモデルに属する。

イ 当時、大陸移動の速さを直接測定して確定したとは書かれていない。

ウ 本文第二・第三段落の証拠と課題に一致する。

エ 海嶺で新しい海底が生まれるという説明は、後の海洋底拡大モデルである。

☆自己採点の観点

- 初期の証拠と、後の海底観測を混同していないか。
- 証拠があったことと、移動の仕組みまで説明できたことを分けたか。

問二 海洋底拡大モデルの働き

設問の意図 新しいモデルが、移動の仕組みと確かめられる予測を加えたことを捉える。

根拠 第五段落。海嶺で新しい海底が作られ、両側へ広がり、別の場所で沈み込むと説明する。

正答
ア

正答の理由 アは、大陸だけでなく海底を含む広い板状部分が動く道筋を示す。

誤答のずれ

ア 海洋底拡大モデルが加えた移動の仕組みに合う。

イ 化石の対応を偶然として退けたのではなく、過去の結合を支える証拠として扱った。

ウ 海底観測は、後の説明モデルを組み立てるうえで重要だった。

エ 地震・火山の分布は、プレート境界を考える証拠の一つである。

☆自己採点の観点

□ 海嶺での生成、両側への移動、別地点での沈み込みをつないだか。

□ 初期の大陸の証拠を、海洋底拡大の-new内容と取り違えていないか。

問三 古い仮説と新しいモデルの関係

設問の意図 科学的更新を、全面否定や単純な証明ではなく、保持と再構成の関係として読む。

根拠 第八・第九段落。大陸の位置変化は受け継がれたが、動く単位と仕組みは新しい観測で組み直された。

正答
エ

正答の理由 エは、旧説から残った部分と、後の証拠によって更新された部分を分けている。

誤答のずれ

ア 初期の証拠を結びつけた動きは、後の説明にもつながった。

イ 動く単位と仕組みが大きく組み直されており、言い換えだけではない。

ウ 海底の証拠は、大陸を含むプレートの移動を説明する中心になった。

エ 本文が示す保持と更新の関係に合う。

☆自己採点の観点

□ 古い仮説を、完全な正解か完全な失敗かの二択で捉えていないか。

□ 残った考えと、組み直された仕組みの両方を確認したか。

問四 大陸移動説の証拠と課題（50～70字）

設問の意図 証拠が仮説を支えることと、仕組みの不足が残ることを一文で結ぶ。

根拠 第二段落の輪郭・化石・岩石・氷河痕跡と、第三段落の移動の仕組みの不足。

必要要素 ①離れた大陸の輪郭・化石・岩石等の対応。②過去の結合と移動を考える根拠。③何がどう動かすかという仕組みは不足。

関係と条件 証拠が支えた内容を先に示し、「一方」で未解決点を置く。

答案の骨格 〴〵の対応は、〴〵を考える根拠になった。一方、〴〵の仕組みは示せなかった。

模範解答

大陸の輪郭、化石、岩石等の対応は、かつて大陸が結合し移動した根拠になったが、何が大陸を動かすかという仕組みは示せなかった。

別解例①

離れた大陸に共通する化石や岩石、対応する輪郭は過去の結合を支えた一方、大陸が海底を越えて動く仕組みまでは説明できなかった。

別解例②

輪郭と化石、岩石や氷河痕跡のつながりから大陸の移動は考えられたが、その力と道筋を示す納得できる説明が当時は不足していた。

答案で注意したい点

「証拠がなかった」としない。複数の証拠はあったが、それらを移動過程へ結ぶ仕組みが十分でなかったのである。

☆自己採点の観点

- 大陸間で対応する証拠を一つ以上示したか。
- その証拠が過去の結合・移動を支えたと結んだか。
- 移動の仕組みが不足したことを残したか。

問五 磁気縞と海底年代の働き（70～90字）

設問の意図 二証拠を同じ語で並べず、左右対称の形成記録と、中心から外へ古くなる順序とという働きを区別する。

根拠 第六段落の左右対応する磁気の帯、第七段落の海嶺付近ほど若く外側ほど古い海底。

必要要素 ①磁気縞は海嶺の両側に対応する。②年代は海嶺付近が若く外側ほど古い。③海嶺で生成して両側へ移る予測と一致する。

関係と条件 磁気の模様と年代の順序を別々に示し、最後に同じモデルの予測へ結ぶ。

答案の骨格 磁気縞はくを示し、年代はくを示す。どちらもくという予測と一致する。

模範解答

磁気縞は海嶺の両側に同じ順序で並び、海底年代は海嶺近くほど若く外側ほど古い。二つとも、海嶺で新しい海底が生まれて左右へ移るというモデルの予測と一致した。

別解例①

海嶺をはさんだ磁気の帯が左右対応し、岩石の年代が中心から離れるほど古くなることは、新しい海底が海嶺で作られ、両側へ順に広がるという説明を別々に支えた。

別解例②

冷えた岩石の磁気が海嶺の両側で似た帯を作り、海底も海嶺付近から外へ向かって古くなるため、海底が中央で生まれ左右へ運ばれるという予測が実際の観測と合った。

答案で注意したい点 「磁気縞と年代がプレートを証明した」とまとめるだけでは、それぞれ何が観測され、モデルのどの予測と合うかが見えない。

☆自己採点の観点

- 磁気縞が海嶺の両側で対応すると示したか。
- 海底年代が海嶺付近ほど若く、離れるほど古いと示したか。
- 二つを、海嶺で生成して両側へ移る予測へ結んだか。

章全体のまとめ

科学的な説明は、古い考えを丸ごと捨てるか、そのまま証明するかの二つだけで進むものではありません。大陸間の証拠を結んだ仮説が問いを作り、海底の新しい観測が仕組みを組み直しました。モデルが生む予測と、磁気・年代・地震等の記録を照合することで、説明の確かさが高まります。

本文資料

大陸移動説、海洋底拡大、磁気縞、海底年代、プレートテクトニクスの学説史は、U.S. Geological Survey, = This Dynamic Earth: Developing the Theory= を参照した。 <https://pubs.usgs.gov/gip/dynamic/developing.html>

海嶺における海底形成と磁気縞の位置づけは、U.S. Geological Survey, = Using the Diagram to Discuss How Plate Tectonics Works= を参照した。 <https://volcanoes.usgs.gov/about/edu/dynamicplanet/nutshell.php>

海底年代と磁気極性の説明は、NOAA, = Age of the Seafloor= を参照した。 <https://sos.noaa.gov/catalog/datasets/age-of-the-seafloor/>

磁気縞の左右対称性と1963年の説明については、The Geological Society of London, * Frederick Vine and Drummond Matthews * を参照した。 <https://www.geolsoc.org.uk/Plate-Tectonics/Chap1-Pioneers-of-Plate-Tectonics/Vine-and-Matthews.html>

第五章 縄文の暮らしについて、どこまで言えるか

この章で身につける力 遺構・遺物として確かめられること、そこからの推測、現代からの評価を分け、地域と時期の範囲を残して説明する。

この章で扱うのは、縄文時代全体ではなく、青森県の三内丸山遺跡から得られた特定の資料です。穴や建物跡、植物・動物の遺存体は何を直接示すのか。そこから暮らしを考えると、どこで推測が加わるのかを読みます。

読み始める前に

- 一 資料で分かること 発見された遺構・遺物・年代を、範囲を変えずに拾う。
- 二 そこからの推測 形、分布、分析結果から、どの暮らし方が考えられているかを見る。
- 三 言える範囲 一遺跡の資料を縄文時代全体や人々の価値観へ広げない。

本文・資料

三内丸山遺跡の資料を読む

① 「縄文の人々は、どのように暮らしていたのか」と問うとき、まず、どの地域と時期の資料を見ているかを確かめる必要がある。縄文時代は長く、列島の環境も一様ではない。この章では、青森県にある三内丸山遺跡のうち、縄文時代前期から中期、紀元前約3900年から2200年ごろの大規模な集落跡を扱う。ここで分かることを、そのまま別の地域や時期へ広げることはいできない。

② 発掘では、多数の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、盛土、大人や子供の墓、土器、石器、木製品、骨角製品などが見つかった。地面に残る穴の形、柱の跡、遺物が出た位置と地層は、資料として記録できる。紀元前約3900年から2200年ごろまで、異なる時期の建物や道具が連続して見つかることも、この場所で生活の痕跡が長く重なったと考える根拠になる。

③ ただし、「穴が見つかった」という記録と、「その穴を何に使ったか」という説明は同じではない。集落の外側にまとまって見つかる、入口が狭く底が広い穴は、貯蔵穴と呼ばれる。形や位置、他の遺跡の例等から、クリなどの木の実や食料を蓄えたと考えられている。しかし、一つ一つの穴に何が入っていたかが必ず残るわけではない。用途は、複数の資料を合わせた推測を含む。

④ 遺跡の低い湿地では、水分が多く空気から遮られていたため、木製品、漆器、動物や魚の骨、植物の種子や木の実などがよく残った。クリやクルミ等の木の実、魚や獣の骨が出土していることは、そこにその種類の遺存体があったという資料上の事実である。それらが食料の残りであるか、どの季節にどれだけ利用されたかは、出た場所、量、加工痕、ほかの資料を合わせて検討する。

⑤ 土壌中の花粉を分析すると、多量のクリ花粉が確認された。その比率や、クリ花粉が遠くへ飛びにくい性質等から、研究者は集落の近くにクリの多い林が広がっていたと推定している。クリ材が建物等に多く使われ、炭化した実も見つかることを合わせると、クリが食

料と材料の両方で重要だった可能性が高まる。ここでも、花粉、木材、実は資料であり、「近くにクリ林があった」「人が林へ手を加えた」は資料を結ぶ説明である。

⑥ クリは明るい場所で育ちやすい。集落の周囲にクリの多い状態が長く続いたとすれば、人々が下草を刈る、利用しやすい木を残すなど、林の状態へ関わった可能性が考えられる。しかし、誰がどの方法で管理したかを直接記した文書はない。「計画的な栽培が確立していた」「自然のまま何も変えなかった」のどちらも、資料から直ちに言い切ることはできない。

⑦ 長い期間の集落跡、住居や貯蔵に関わる遺構、多様な植物・動物の遺存体は、狩猟や採集をする人々が常に移動し続けていたという単純な像を見直す材料になる。農耕社会だけが定住できるという見方も修正を求められる。一方、この遺跡に長期の集落があったからといって、縄文時代のすべての集団が同じ規模で定住し、同じ資源を使ったとはいえない。

⑧ 現代の読者は、こうした資料から「自然と調和していた」「進歩を求めなかった」と評価したことがある。しかし、遺物は当時の人々の価値観をその言葉で語らない。環境へ働きかけた可能性と、資源を利用し続けた痕跡は読めても、人々が自然をどう考えていたか、後の農耕を望んだかどうかまでは確かめられない。現代の評価は、資料から直接分かる事実と分けて示す必要がある。

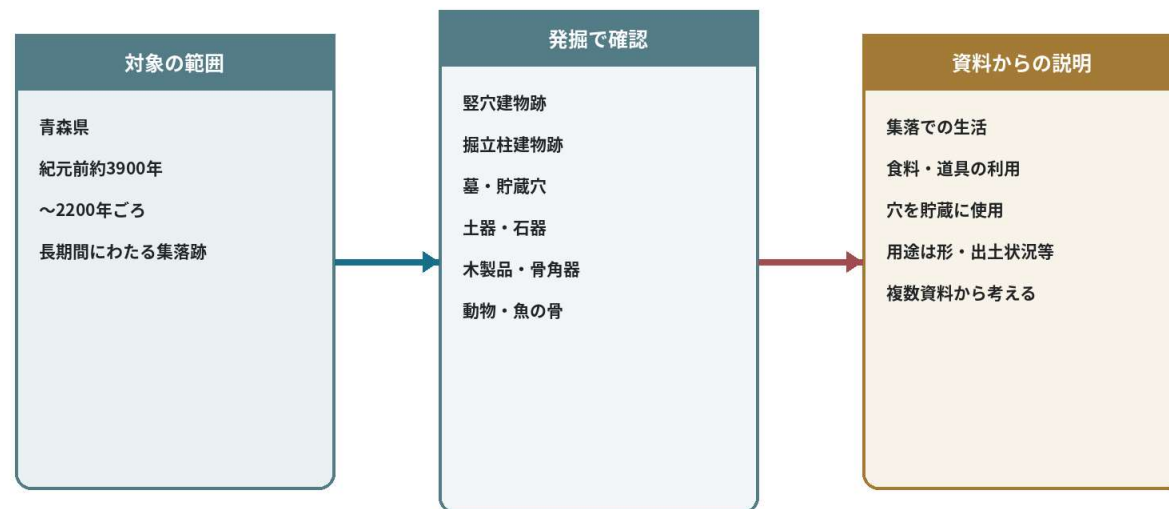
⑨ 考古資料を読むことは、過去を何も語れないものにするのではない。遺構の配置、遺物、花粉等の分析を重ねれば、この場所で長く生活し、さまざまな資源を利用し、周囲の植物へ関わった可能性を、根拠とともに強く示せる。同時に、地域と時期を残し、推測を事実のように言い切らないことで、別の遺跡から異なる暮らしが見つかる余地も守られる。

段落番号は、設問で根拠を確認しやすくするために編集上付したもので、本文の一部ではありません。

資料一 三内丸山遺跡で確認された主な遺構・遺物

対象地域と時期、発掘で確認されたもの、用途を考える際に加わる推測を分けて示す。

三内丸山遺跡で確認された主な遺構・遺物



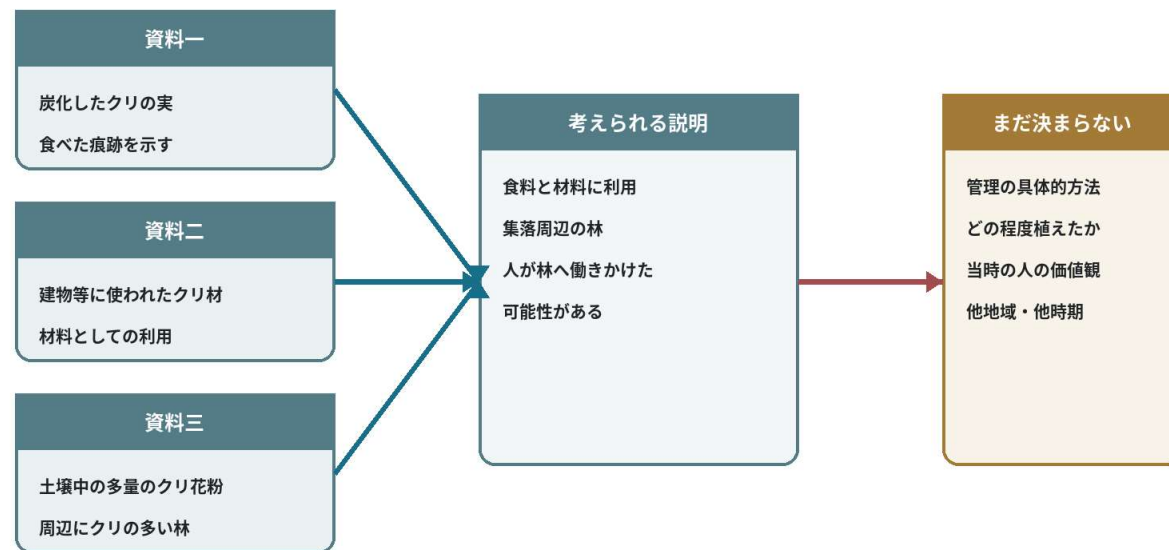
資料から直接確かめられるものと、用途・暮らしについて加わる説明を分ける。
この遺跡の記録を、縄文時代の全地域・全時期へそのまま広げない。

公的な遺跡解説をもとに、和会塾が学習用に整理した模式資料である。遺構の数や配置を実測図として示すものではない。

資料二 クリ利用についての証拠と推測

出土・分析で確認された内容から、どのような説明が考えられ、どこに未確定部分が残るかを示す。

クリ利用についての証拠と推測



矢印は、確定した因果ではなく、複数の資料を結ぶ説明の方向を示す。

矢印は確定した因果ではなく、複数資料を結ぶ研究上の説明の方向を示す。

設問

問一 資料から直接確かめられること

本文と資料一・二から直接確かめられることとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

- ア 縄文時代の人々は列島のすべての地域で同じ規模の集落を作り、同じ方法でクリを管理した。
- イ 三内丸山遺跡では、特定時期の建物跡や墓、クリの実・材・花粉等が確認された。
- ウ 貯蔵穴の一つ一つには必ずクリが入り、その種類と年間の消費量まで記録されていた。
- エ 当時の人々は自然との調和を重んじ、農耕社会への移行を自ら望まなかった。

資料で分かること 地域・時期…

確認された遺構・遺物…

解答欄（記号）

解答 〔 〕

点検 ☐本文の範囲 ☐関係 ☐確かさ 迷った選択肢…

問二 クリ林について言える範囲

三内丸山遺跡周辺のクリ林について、本文と資料二から考えられることとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア クリ花粉が多量にあるため、縄文時代の列島全域で同じ栽培法と管理組織が完成していたと分かる。

イ クリ材が建物に多く使われたため、食料としてクリの実を利用しなかったことが確定する。

ウ 実・材・花粉を合わせると、周辺のクリを多く利用し、林へ関わった可能性が考えられる。

エ クリ林の存在から、当時の人々全員が自然を守る価値観を共有したと直接読み取れる。

資料で分かること ..

そこからの推測／言える範囲 ..

解答欄（記号）

解答 〔 〕

点検 □本文の範囲 □関係 □確かさ 迷った選択肢 ..

解答・解説

本文・資料の流れ

第一・第二段落 対象を三内丸山遺跡の紀元前約3900～2200年ごろに絞り、長期の生活痕跡を示す。

第三・第四段落 穴の形や出土遺存体という資料と、貯蔵・食料利用という説明を分ける。

第五・第六段落 クリの実・材・花粉を結び、林への働きかけの可能性と未確定部分を示す。

第七～第九段落 定住や多様な資源利用を考える一方、縄文全体や価値観へ一般化しない範囲を定める。

問一 資料から直接確かめられること

設問の意図 特定遺跡で確認された資料と、そこからの一般化・推測・評価を区別する。

根拠 第一・第二・第四・第五段落と資料一・二。対象時期と、建物跡・墓・クリの実・材・花粉等が示される。

正答 イ

正答の理由 イは、地域と時期を保ち、発掘・分析で確認された内容だけを述べている。

誤答のずれ

ア 一遺跡の資料を、列島全体と縄文時代全体へ広げている。

イ 対象範囲と、資料として確認された内容に一致する。

ウ 貯蔵穴の用途には推測が含まれ、各穴の内容や消費量が必ず分かるわけではない。

エ 価値観や後の農耕への希望は、遺構・遺物から直接確かめられない。

☆自己採点の観点

□ 対象を三内丸山遺跡の特定時期に保ったか。

□ 出土・分析で確認された内容と、推測・評価を分けたか。

問二 クリ林について言える範囲

設問の意図 複数資料から支えられる推測を認めながら、地域・方法・価値観の言いすぎを避ける。

根拠 第五・第六段落と資料二。クリの実・材・花粉を合わせ、人による林への関わりの可能性を考える。

正答
ウ

正答の理由 ウは、複数の資料を用い、管理を可能性として示し、具体的方法や全地域へ広がっていない。

誤答のずれ

ア 一遺跡の花粉から、全地域の同一栽培法までは言えない。

イ 炭化した実も見つかり、材の利用と食料利用は両立し得る。

ウ 資料を結んだ推測として、本文が認める範囲に合う。

エ 自然観という価値判断は、クリ林の資料が直接示す内容ではない。

☆自己採点の観点

□ 実・材・花粉という複数の資料を結んだか。

□ 林への関わりを可能性として示し、具体的方法を断定していないか。

問三 貯蔵穴の事実と推測（60～80字）

設問の意図 穴の形・位置という記録と、食料貯蔵という用途の推測を分ける。

根拠 第三段落と資料一。入口が狭く底が広い穴が集落外側にまよること、木の実等の貯蔵用途の推測。

必要要素 ①入口が狭く底が広い穴が外側にまよる。②木の実・食料の貯蔵と推測される。

③各穴の中身は必ず確定しない。

関係と条件 確認できる形と分布を先に示し、用途を推測として結び、未確定部分を残す。

答案の骨格 資料から〴〵が確認でき、〴〵に使ったと考えられる。ただし〴〵までは確定しない。

模範解答

集落の外側に、入口が狭く底が広い穴がまよっていると確認でき、形や位置から木の実等の貯蔵に使ったと考えられるが、各穴の中身までは確定しない。

別解例① 資料が示すのは、外側に集まるフラスコ状の穴である。そこから実際に食料を蓄えた用途が推測されるが、すべての穴にクリが入っていたとは言い切れない。

別解例② 入口が狭く底の広い穴が集落外側にまとまるのは資料上の事実で、木の実等を保存した貯蔵穴と考えられる。ただし一つずつの内容物は直接は残らない。

答案で注意したい点 名称が「貯蔵穴」だから用途も直接見えたと考えない。穴の形・位置と、複数資料から付けられた用途の説明を分ける。

☆自己採点の観点

- 穴の形と分布を、資料から確かめられることとして示したか。
- 食料を蓄えた用途を、推測として表現したか。
- 各穴の中身を一律にクリと断定していないか。

問四 三内丸山遺跡から言える暮らし（80～100字）

設問の意図 長期集落と資源利用を資料からまとめ、地域・時期・価値観の範囲を残す。

根拠 第一～第九段落と資料一・二。長期の生活痕跡、住居・貯蔵遺構、植物・動物遺存体、クリ林への関わりの可能性、一般化の注意。

必要要素 ①特定時期に長期の集落があった。②多様な資源を利用し、クリ林へ関わった可能性。③縄文全体や自然観までは言えない。

関係と条件 根拠から考えられる暮らしを示し、「ただし」で地域・時期・価値観の範囲を置く。

答案の骨格 〳から、この場所で〳と考えられる。ただし、〳全体や〳という価値観までは言えない。

模範解答 建物跡、貯蔵穴、植物・動物の遺存体から、この時期の三内丸山では長く集落を営み、多様な資源を利用し、クリ林へ関わった可能性が考えられる。ただし、縄文時代全体の暮らしや自然観までは言い切れない。

別解例① 長期に重なる生活跡と、木の実・魚・獣、クリ材や花粉の資料は、この場所で資源を組み合わせ、林へ働きかけた可能性を支える。一方、それを全地域の生活や「自然との調和」という価値へ広げることではない。

別解例②

三内丸山遺跡の特定時期には、定住的な集落で多様な食料と材料を利用し、周辺のクリが育つ環境へ関わったと考えられるが、同じ生活を縄文の全地域に当てはめたり、当時の価値観を決めたりはできない。

答案で注意したい点 「縄文人は自然と共生した」と結び、特定遺跡の資料、研究上の推測、現代の評価が一文で混ざる。どの範囲の何が言えるかを残す。

☆自己採点の観点

- 長期の集落と、多様な植物・動物資源の利用を示したか。
- クリ林への関わりを、資料から考えられる可能性として書いたか。
- 地域・時期を縄文時代全体へ広げていないか。
- 「自然と調和した」等の価値観を資料の事実にしていないか。

章全体のまとめ

考古資料は、過去の暮らしを考える確かな手掛かりです。ただし、穴の形、出土物、花粉等として確認できることと、用途、管理、価値観についての説明は確かさが異なります。地域と時期を示し、資料を結ぶ推測を明らかにすれば、言いすぎを避けながら、過去について豊かに考えられます。

本文資料

対象時期、遺構・遺物、貯蔵穴、低湿地の出土資料は、特別史跡三内丸山遺跡「三内丸山遺跡とは」を参照した。<https://sannaimaruyama.pref.aomori.jp/about/iseki/>

集落の継続、クリ・クルミ、魚獣骨、クリ花粉とクリ林の推定は、文化庁「我が国を代表する北の縄文集落：三内丸山遺跡」を参照した。https://www.bunka.go.jp/prmagazine/rensai/news/news_002.html

北日本の17遺跡という範囲で、定住的な狩猟・漁労・採集社会の評価は、UNESCO World Heritage Centre, "Jomon Prehistoric Sites in Northern Japan" を参照した。<https://whc.unesco.org/en/list/1632/>

本文と模式資料は上記資料を照合して和会塾が独自に執筆・作成し、写真や発掘実測図は転載していない。

第六章 同じ記録から、何を言うか

この章で身につける力 同じ記録を用いる二つの意見文について、共有する事実、異なる説明・評価、資料から言える範囲を統合する。

二つの意見文は、同じ広場の観察記録を使います。どちらも記録の一部に根拠がありますが、混雑の理由と、先に行うべき対策の見方が異なります。表の数値、説明、提案を一つの確かさで読まないようにします。

読み始める前に

- 一 自由メモ 共通して使う事実、異なる説明、記録の条件を自分で配置する。
- 二 見方の違い 一方を正解と決めず、何を不足・原因・優先事項とみるかを比べる。
- 三 言える範囲 観察していない天候・曜日や、まだ試していない対策を残す。

本文・資料

広場のベンチをめぐる記録

① 青葉市の学習センター前に、12席分のベンチがある「みどり広場」がある。昼に座れないという声があったため、運営担当は九月の晴れた平日六日間、8時、12時30分、16時30分、18時の四回、同じ位置から利用状況を記録した。表一の人数は、各時刻に一度数えた値の六日平均を四捨五入したものである。

② 記録したのは、座っていた人数と、ベンチの近くで立ったまま休んだり空きを待ったりしていた人数である。立っていた人全員に理由を尋ねたわけではないため、その人数をそのまま「座りたかった人」と呼ぶことはできない。また、雨の日、休日、九月以外の季節は観察していない。

③ 広場には樹木があるが、影の位置は時刻によって変わる。担当者は、各時刻に日陰となっていた席数も記録した。12時30分には日陰が二席しかなく、16時30分には六席あった。この記録から、席の総数だけでなく、時刻による居心地の違いも考える材料が得られる。ただし、利用者が実際に日陰を選んだ理由までは、人数の表だけから確定しない。

④ 表に示した平均値は、六日間を一つの傾向として見る助けになる一方、日ごとの差を隠す。12時30分の着席数は六日とも12人だったが、近くに立つ人は三人の日も七人の日もあった。平均五人という一つの数だけで、毎日まったく同じ状況だったとはいえない。

段落番号は、設問で根拠を確認しやすくするために編集上付したもので、本文の一部ではありません。

表一 みどり広場の利用記録（教材用の架空資料）

九月の晴れた平日六日間に観察した平均人数と、各時刻に日陰となった席数を示す。広場のベンチは全12席である。

みどり広場の利用記録

九月の晴れた平日六日間の平均／ベンチ全12席

時刻	着席していた人	近くに立っていた人	日陰になった席
8時	3人	0人	8席
12時30分	12人	5人	2席
16時30分	9人	1人	6席
18時	2人	0人	10席

観察していない条件：雨天・休日・他の季節
立っていた人の目的は調査していない。数字だけで、その理由は決められない。

人数、施設、期間は教材用の架空設定である。立っていた人の目的は調査していない。

意見文△ 席数を増やす試行を

12時30分には12席がすべて使われ、近くに立つ人も平均五人いた。昼の利用者に対して、今の席数が足りないと考える理由になる。まず昼の二時間だけ、移動できるベンチを四席分

追加し、立つ人が減るかを調べたい。追加後も満席が続くなら常設席を検討し、減らないなら立っていた理由を尋ねる必要がある。

意見文㊦ 日陰と配置を先に確かめる

満席になるのは12時30分で、その時間の日陰は二席しかない。16時30分には九人が座っているが、空席も三席ある。席の総数だけでなく、昼の暑さや日陰の少なさが利用の集中を生んでいる可能性がある。まず仮設の日よけと今あるベンチの配置変更を試し、どの席が選ばれるかを記録してから、増設の必要を判断したい。

記録と提案の関係

① 意見文A・Bは、12時30分に全席が使われたという事実を共有している。Aは、近くに立つ人もいたことから、席数の不足を中心に考える。Bは、日陰が二席しかなかったことと、別の時刻には空席があることから、日陰と配置の問題を中心に考える。どちらも表の数値を使うが、何を原因として重く見るかが異なる。

② 二つの提案は、まだ実施した結果ではない。移動式ベンチを増やせば立つ人が減る、日よけを置けば利用が分散するという部分は、これから確かめる予想である。AもBも期限を区切った試行と、結果に応じた次の判断を示している点では共通する。

③ 表一からは、観察した晴天の平日六日間について、昼に満席となり、近くに立つ人がいたことを言える。しかし、「広場はいつも席不足である」「原因は日陰だけである」とは言えない。休日や雨天、別の季節は観察しておらず、立っていた理由も尋ねていないからである。

④ 同じ記録から異なる意見が生まれることは、数字を好きに読んでよいという意味ではない。どの数値を使い、そこから何を説明し、どの対策を予想しているかを示す必要がある。さらに、まだ決められない点を試行へ変えれば、意見は次の記録によって確かめ直せる。事実、説明、評価を分けることは、判断を止めるためではなく、判断を直せる形にするためなのである。

⑤ 提案には、原因についての説明だけでなく、何を先に改善したいかという評価も入る。△は座れる人数を早く増やすことを、□は同じ席数でも使いやすい環境を整えることを優先する。優先事項は表が自動的に決めるものではないが、使った事実と試行の結果を示せば、別の人も判断の筋道を確かめられる。

段落番号は、設問で根拠を確認しやすくするために編集上付したもので、本文の一部ではありません。

設問

問一 表一から直接言えること

表一と本文から直接言えることとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア 観察した晴れた平日の12時30分には全席が使われ、近くに立つ人が平均五人いた。

イ 一年を通して昼は必ず満席になり、毎日少なくとも五人が座る場所を探して長時間待っていた。

ウ 12時30分の日陰が二席だけだったことが、満席を起こした唯一の原因である。

エ 移動式ベンチを四席追加すれば、近くに立つ人は全員確実にいなくなる。

自由メモ 観察した条件／数値…

表が直接示さない原因・予測…

解答欄（記号）

解答 ()

点検 ☐本文の範囲 ☐関係 ☐確かさ 迷った選択肢…

問二 二つの意見文の関係

意見文A・Bの共通点と違いについて最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア アだけが表一の人数を根拠にし、Bは広場を見た印象だけで日よけと配置変更を提案している。

イ Aは昼の満席を記録と異なるとして否定し、Bは昼以外も常に満席だと評価している。

ウ 両者は席不足を同じ原因で説明し、常設ベンチの即時増設を共通の結論として求めている。

エ 両者は昼の満席を共有するが、Aは席数、Bは日陰と配置を先に確かめようとする。

自由メモ 共通する事実..

Aの見方／Bの見方..

解答欄(記号)

解答 []

点検 ☐ 本文の範囲 ☐ 関係 ☐ 確かさ 迷った選択肢..

任意課題 この記録へ、もう一つ問いを置く

この課題は必須問題ではありません。

表一と意見文ア・田を読んだ人が、さらに調査を進められるような問いを一つ作ってください。個人の経験を書く必要はありません。問いの下に、その問いへ答えるために集めたい記録を一つ添えましょう。

問いが表一の内容とつながり、何を追加で観察・質問すれば答えへ近づけるかが示されていれば成立します。たとえば、立っていた人の目的、休日の利用、季節による日陰の変化等が考えられます。

解答欄

問い…

集めたい記録…

解答・解説

本文・資料の流れ

第一～第三段落・表一 晴天の平日六日間に限った人数、時刻、日陰席数と、観察していない条件を示す。

意見文A・B 昼の満席を共有しながら、席数と日陰・配置という別の原因を重く見て、異なる試行を提案する。

記録と提案の間 観察事実、原因の説明、対策の予想を分け、試行後の記録で判断を直せる形にする。

問一 表一から直接言えること

設問の意図

観察期間と数値を保ち、年間の一般化、原因、対策結果を資料事実と分ける。

根拠 第一・第二段落と表一。九月の晴れた平日六日間、12時30分の着席12人・立つ人平均五人。

正答

ア

正答の理由

アは、観察した条件と表の数値を変えずに述べている。

誤答のずれ

ア 期間・天候・曜日と数値が表一の範囲に一致する。

イ 観察していない季節へ広げ、立つ人の目的も確定している。

ウ 日陰は一つの説明候補だが、唯一の原因とは記録から決まらない。

エ 増設後の結果はまだ観察されておらず、意見文Aの予想である。

☆自己採点の観点

□ 九月の晴れた平日六日間という条件を保ったか。

□ 数値から原因や対策結果を直接断定していないか。

問二 二つの意見文の関係

設問の意図

共有する記録と、原因・優先事項についての異なる見方を分ける。

根拠 意見文A・Bと「記録と提案の間」第一・第二段落。

正答 エ

正答の理由 エは、共通する満席記録と、Aが席数、Bが日陰・配置を重く見る違いを捉える。

誤答のずれ

ア Bも日陰席数、時間別の着席数という表一の記録を使っている。

イ Aも12時30分の満席を根拠にし、Bは昼以外が常に満席とは述べてない。

ウ 原因の見方と先に行く試行は異なり、即時の常設増設を共通提案にしていない。

エ 共通事実と、説明・提案の違いに一致する。

☆自己採点の観点

□ 両者が共有する事実を一つ捉えたか。

□ 原因として重く見る点と、先に試す対策の違いを確認したか。

問三 共通事実と見方の違い(80〜100字)

設問の意図 共有する観察事実と、そこから加えられた異なる説明・提案を統合して比較する。

根拠 表一、意見文A・B、「記録と提案の間」第一段落。

必要要素 ①12時30分の全席利用と立つ人を共有。②Aは席数不足を重視し追加席を試す。③B

は日陰・配置を重視し日よけ等を試す。

関係と条件 共通事実を先に置き、「一方」で異なる原因評価と対策を対比する。

答案の骨格 両者は〴〵を共通の事実とする。Aは〴〵と見て〴〵を、Bは〴〵と見て〴〵を先に試そうとする。

模範解答

両者は、12時30分に全12席が使われ、近くに立つ人もいた事実を共有する。Aは席数不足を重く見て追加席を、Bは日陰の少なさと配置を重く見て日よけや配置変更を先に試そうとする。

別解例①

A・Bは晴れた平日の昼に満席となり立つ人がいた記録とともに用いるが、Aは座席数が足りないと説明して移動式ベンチを試し、Bは日陰と配置が利用を偏らせると考えて日よけを試す。

別解例②

晴れた平日の昼に全席が埋まり、近くに平均して立つ人がいた点は共通する。一方、Aは席の不足を原因候補として増設を試し、Bは日陰の少なさを重視して日よけと配置変更を試そうとする。

答案で注意したい点 「Aは増設に賛成、Bは反対」と単純化しない。Bも必要性を調べようとしており、両者は先に確かめる原因と試行が違う。

☆自己採点の観点

- 昼の満席と近くに立つ人という共通事実を示したか。
- Aを席数、Bを日陰・配置という異なる見方へ結んだか。
- それぞれが先に試そうとする対策を示したか。

問四 言いすぎを直す（100～120字）

設問の意図 期間の一般化、立つ理由の断定、未検証の対策を直し、観察事実と次の試行を結ぶ。

根拠 第一～第三段落、表一、意見文A・B、「記録と提案の間」第二・第三段落。

必要要素

①晴れた平日六日間の昼に満席・立つ人。②通年・理由・最適策は未確定。③追加席や日よけ等を期限つきで試し、結果を比べる。

関係と条件

観察範囲の事実↓まだ言えない点↓比較できる試行、の順にまとめる。

答案の骨格

観察したくではくが確認された。ただしくは未確認であるため、くを試し、結果から判断する必要がある。

模範解答

九月の晴れた平日六日間では、12時30分に全席が使われ、近くに立つ人もいた。ただし、他の季節や休日、立っていた理由は未確認であるため、追加席と日よけ・配置変更を期限つきで試し、利用の変化を比べて常設増設を判断する必要がある。

別解例①

観察した晴天の平日には昼の満席が確認されたが、広場がいつも席不足だとは言えず、日陰の少なさが影響した可能性も残る。移動式の席と仮設日よけを別々に試し、立つ人や選ばれる席の変化を記録してから、常設席の数を決めるべきである。

別解例②

表一から言えるのは、九月の晴れた平日の昼に全席が埋まり、近くに立つ人がいたことまでである。通年の需要と混雑の原因は決まらないので、席の追加と日陰・配置の改善を試行し、それぞれの結果を確かめた上で常設増設の必要を判断する。

答案で注意したい点 「倍にすべき」を「増やすとよい」に弱めるだけでは足りない。どの条件で混雑が観察され、何が未確認で、次に何を比べるかを示す。

☆自己採点の観点

- 観察期間・天候・曜日の範囲を残したか。
- 立っていた理由や、常に席不足だという結論を確定していないか。
- 追加席と日よけ・配置等を、未実施の試行として示したか。
- 試行後の記録から常設増設を判断すると結んだか。

章全体のまとめ

数字は、観察した条件の中で確かめられる事実を示します。そこから原因を説明し、何を優先するかを決めるときには見方が加わります。複数の意見が同じ記録を使っても、何を重く見るかは異なり得ます。観察範囲と未確定部分を示し、試行の結果へ戻れる提案にすることで、判断は確かめ直せます。

本文資料

青葉市学習センター、みどり広場、表一の数値、意見文A・Bは、読解問題のために和会塾が設定した架空例である。

全六章を終えて

同じ出来事にも複数の説明があり、同じ対象の説明でも目的によって選ぶ情報が変わります。短い答えは問いと条件へ戻して読み、科学や考古学の説明は観測・資料と推測の関係を確かめます。数字から提案へ進むときも、観察した範囲と、まだ確かめていないことを区別します。事実と見方を分けることは、見方を捨てることではありません。根拠と条件の見える説明へ整えることで、自分と異なる読み方も比べられるようになります。

次の練習へ

本文のどこを根拠にするかを幅広く練習したいときは、第一冊へ進めます。

必要要素と関係を決めて答案を組み立てたいときは、第三冊へ進めます。

複数の資料・立場を長い答案へ統合したいときは、第四冊へ進めます。

利用について

個人での学習のための印刷、および学校・学習支援の場における非営利の授業利用を認めます。

教材データそのものの再配布、販売、ウェブサイト等への転載、および改変したものの配布はご遠慮ください。

公的資料を参照した章は、各章末に資料名と参照先を示しています。教材用の架空資料は、その旨を本文・資料頁と章末に明記しています。

奥付

書名 現代文問題集 第五冊 事実と見方を読み分ける

位置づけ 導入・説明文と評論の基本

発行 2026年8月 改訂完成版

制作 和会塾（なごらいじゅく）

ウェブサイト <https://kokugo-senka.top/> © 2026 和会塾